



「香害」は中国人観光客を遠ざける？

— 今、守るべき日本の空気と水

中央大学文学部教授

榎本泰子

1968年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。学術博士。著書に『楽人の都・上海』、『上海オーケストラ物語』、『上海 多国籍都市の百年』、『宮崎滔天』、『敦煌と日本人』がある。

今年10月11日より新型コロナウイルスの水際対策が大幅に緩和され、さっそく日本各地を訪れる外国人観光客の姿が注目を集めた。コロナ以前のように、気前よくお金を落としてくれる中国人客の到来を、待ちわびている観光・サービス業界の人は少なくないだろう。

2014年の春節前後に始まった「爆買い」ブームが一段落したあと、中国人観光客の動向は「モノ消費」から「コト消費」に移ったとされ、日本の地理自然や歴史伝統を積極的に体験しようとする人が増えていた。日本人の暮らしか文化に接することによって日本の印象そのものがよくなり、日中関係に好影響を与える可能性が指摘されていただけに、コロナ禍で往来が途絶えてしまったことは大きな損失だったといえる。

本稿を執筆している段階で、中国

のゼロコロナ政策が今後どうなるかはまだ見通せないが、中国人観光客は将来的にはまた日本に戻ってくるだろう。しかしその時にまだ日本が魅力ある国であり続けているかどうかを、筆者は心配している。中国人が求めるきれいな空気やおいしい水が損なわれつつあるのに、政財界には全く危機感がないからだ。

1. 「洗肺旅行」の行く先

コロナ以前、中国人の間で「洗肺（シーフェイ）」という言葉が流行した。肺を洗う、すなわちきれいな空気を吸うことを意味し、PM2.5で汚染された中国都市部を抜け出して、地方できれいな空気や美しい自然を堪能することを指す。

2019年5月の『AERA』の記事によれば、中国国内の地方都市への「洗肺旅行」がブームになった

のが2013年頃からで、「爆買い」ブームが終わったあとに日本へも「洗肺需要」が押し寄せた。この記事や、中国人の旅行ブログなどを見ると、人気のある「洗肺」スポットは中国国内ではハルビン、廈門、三亜（海南島）であり、国外では日本のほかにブーケット（タイ）、バリ（インドネシア）が挙げられていた。

日本の中では、上海からの直行便がある佐賀がとりわけ注目されていた。佐賀空港には、2012年から中国最大の格安航空会社・春秋航空が上海便を往復させており、2014年には佐賀―上海線が深圳まで延伸された。2019年には佐賀―西安線も就航し、観光客の利便性が増す高まっていた。『AERA』の記事によれば、中国人観光客の数は就航当初の6000人余りから、2018年には約5万9000人と十





図1 中国語で作成された九州各地の宣伝パンフレット

倍近くに増えた。2019年春（つまりコロナ禍が始まる前年）、中国の四連休初日にあたる五月一日には、上海発佐賀空港行きのフライトの搭乗率は99・5%に達したという。これらの数字は、中国人の佐賀に対する熱い思いを物語っている。嬉野や武雄などの温泉に恵まれ、昔ながらの棚田が広がる田園風景は、かの国の人の目に「桃源郷」と映っていたらしい。単にきれいな空気を吸えるだけでなく、有田焼や伊万里焼など、伝統がありブランド力の高い特産品もある。グルメには「佐賀牛」を味わう絶好の機会だ。これらを直接体験した人によって、佐賀の魅力はSNSやブログで拡散され、新たな客を獲得していた。

佐賀が注目を集めるようになったのは、人口減少に悩み、経済活性化の起爆剤として中国人観光客を誘致したい地方自治体の売り込み努力もあった。工藤哲『上海―特派員が見た「デジタル都市」の最前線』（平凡社新書、2022年）によれば、中国大陸と地理的に近い九州の諸都市はとりわけ積極的で、「上海では九州各県の自治体が『オール九州』という名で一体で活動して」いたという（同書150頁）。私も、かつて上海の日系旅行代理店を訪れた時、ずらりと並んだ九州各地の美しいパンフレットに驚いたことがある（図1）。

国と国との外交とは別に、地方自治体の首長（知事、市長、町長）による「上海詣で」は盛んに行われており、特産品の宣伝のほか、直行便の開設を求めることも目的の一つだった。同書によれば、2019年に上海市や周辺四省を訪問した地方自治体の首長は、佐賀県知事を含めて延べ30人を超えたという。

中国の人々の行動範囲が日本の都市部から地方に広がっていることは、留学生たちの話を聞くとよくわかる。今年の夏休みは、コロナ禍で中国に帰れない三度目の夏になったが、どのように過ごしたのかを質問してみると、近場では熱海や伊豆、遠いところでは仙台や熊本など、日本国内の旅行を楽しんだ様子だった。行く先を選ぶ基準はさすがに若者らしく、好きなアニメの「聖地」めぐりが目的であったりするようだが、訪問地で目にした美しい海や山、珍しい郷土料理などについて、話が尽きることはなかった。

2. 日本の空気の変化

—「香害」の蔓延

中国の人々が喜ぶ日本の姿とは、きれいな空気と蛇口からそのまま飲める水、美しい自然と素材を生かした料理、そしてそれらが全国津々浦々に存在し、等しく「安心・安全」に享受できる、ということだろう。中国人観光客のみならず、今後多くの外国人に日本を訪問してもらうためには、こうした日本の長所をぜひとも維持していかなければならない。

しかし近年、日本の美しい自然やおいしい料理の源である空気と水の質が、急速に悪化している。人口の多い都市部だけでなく、リゾート地や農村部など、人が暮らし、人が赴くところにはどこでも汚染が広がっている。「香害」である。「香害」とは、合成洗剤や柔軟剤、消臭剤、芳香剤などの日用品に含まれる化学物質によって、引き起こされる健康被害や環境汚染のことだ。「香り」の害という字面から、人工香料のことのみを指しているように誤解されがちだが、「抗菌」「消臭」に関わる成分なども被害の原因となる。日本消費者連盟を中心とする「香害をなくす連絡会」が2019～2020年に実施した調査では、「香り」による健康被害を訴えた人の九割近く（86・0%）が、原因として柔軟剤を挙げている。日本では2000年代の終わり頃から香り付き柔軟剤が流行するようになり、繊維を柔らかくするという柔軟剤本来の目的以上に、衣類に「香り」を付ける働きが強調されるようになった。今日では、店頭に並んでいる合成洗剤や柔軟剤の大半が、何らかの「香り」をうたったものとなっている。しかしその結果、頭痛・吐き気・目鼻の痛み・せき・皮膚炎などの症状に悩まされる人が急増した。最近では、実際に警鐘を鳴らす新聞・雑誌の記事なども目につくようになり（次頁の図2）、「香害」が社会問題であること



図2 「香害」を訴えるシャボン玉せっけん株式会社の意見広告。
〔『毎日新聞』2022年6月5日朝刊11面〕

が認知されるようになった。

柔軟剤の「香り」は、石油由来の化学物質からなる人工香料（合成香料）を、数百種類も組み合わせで作られる。香料にはアレルギー性、神経毒性、変異原性、発がん性、内分泌攪乱作用などを持つものがある。

メーカーは製品の安全性をうたっているが、合成香料を単体ではなく、数百種類も同時に吸い込むことのリスクはまだ十分に研究されていない。

合成香料や、「抗菌」「消臭」に関わる成分などは、マイクロカプセルに包まれており、洗濯の際に衣類の繊維に付着する。プラスチックでできたカプセルは、衣類を身につけた人が動いた時、体温や摩擦によって時間差をおいて破裂する。この「徐放」技術によって「香り」は長続き

発がん性のあるイソシアネートが飛び散る危険性が指摘されている。

日常的に用いる合成洗剤や柔軟剤に、危険性のある成分が含まれているとは、にわかには信じられないだろう。私も約3年前に、隣人が使用する柔軟剤の匂いで頭痛と吐き気に襲われるまでは、「香害」についてまったく知らなかった。わが家では柔軟剤を使っていないので、異変を感じてすぐ隣人に伝えたが、「市販の製品を使っているだけなのに何が問題なのか」といわれ、まったく取り合ってもらえなかった。自宅の窓が開けられなくなり、換気扇も回せなくなつたため、家事全般に支障を来すようになった。シャンプーやハンドクリームなど、自分が使っていた製品の「香り」にも吐き気を催すようになり、

すべて捨てざるを得なかった。

今では、通勤のため電車に乗ろうとすると、電車が駅のホームにすりこんできた瞬間からモワッとした合成香料の匂いを感じる。車両の開けられた窓から流れ出す匂いが、風圧と共に襲ってくるのである。意を決して乗り込むと、マスク越しであってもさまざまな「香り」がまざりあつて充滿しているのがわかる。柔軟剤、整髪料、制汗スプレー、化粧品……まるで空気がピンク色や黄色に染まってマープル模様になっているようだ。学校でも、スパーでも、住宅街でも、ごく普通の場所と普通の人々から驚くほど強烈な「香り」がする。「色」の付いていない空気を探すことの方が難しくなってしまった。

大量の化学物質に接するか、または微量でも長期的に接していると、ごくわずかな成分に接しただけで症状が引き起こされる化学物質過敏症になる恐れがある。注意したいのは、化学物質過敏症は過敏な体質の人がなる特殊な病気ではなく、誰でもなる可能性があることだ。その意味では花粉症にも似ている。しかし化学物質過敏症の日常生活に対する影響は深刻で、頭痛や倦怠感などで寝た

きりになったり、学校や職場で症状がひどくなるため辞めざるを得なかった人もいる。

ある推計によれば、日本国内の「香害」被害者は約1000万人に達し、化学物質過敏症の患者は、予備軍を含めれば550万人に及ぶという⁽³⁾。もはや国民病の域に達しつつあると思われるが、これは日本人だけがかかる病気ではない。日本で暮らす留学生、外国人労働者などもすべて含めて、被害に遭う可能性があるのだ。

3. 失われる日本の魅力

本稿執筆の参考にした水野玲子『香害は公害——「甘い香り」に潜むリスク』（ジャパンマシニスト社、2020年）のタイトルが示すように、「香害」は不特定多数の被害者を生んでいるという意味で「公害」である。しかしそれは高度成長期の企業活動に伴う公害とは異なり、消費者が被害者にも加害者にもなり得るやっかいな構造を持っている。その結果、製品の製造・販売を担っているメーカーの責任が覆い隠されてしまう。「香害」は健康被害を引き起こすだけでなく、マイクロカプセルが人の衣服や身体を介して意図せぬ場所に

張り付くため、店頭の商品や図書館の本などに「移香」するという問題もある。これは商品の汚損やサービスの低下につながり、すべての消費者に関わる重大な問題である。

欧州化学庁(ECHA)の「一次マイクロプラスチック規制提言書」(2019)によれば、洗濯時に柔軟剤を使用すると、入っているマイクロカプセルの80%は下水に流れるという(前出『香害は公害』、36頁)。微細なプラスチックは下水処理場でも処理しきれず、そのまま河や海に放出されて水質汚染を招き、ほかの生物にとりこまれる危険性もある。東京大学の山室真澄教授らのグループは、市販の柔軟剤に使用されている合成香料の成分が、西日本や首都圏で捕獲されたヤマトシジミから検出されたとの研究結果を発表している。⁽⁴⁾ ヤマトシジミ(二枚貝)は日本の固有種で、汽水域に生息し、日本のシジミ漁業のほとんどを占めているという。とすると、私たちがシジミ汁を食べる時、柔軟剤の香料を一緒に食べている可能性があるということだ。シジミに鉄分やカルシウムがいかに多く含まれていても、シジミの香りではなく人工的なフローラル

臭がするのでは食べたくもない。出汁から具まで、魚介類を多く使用する日本料理にとって、河や海の水が汚れていることは致命的だ。これでは日本人の食生活に影響があるだけでなく、各地の料理を楽しむに旅行に来る外国人の期待を裏切ることになるのではないだろうか。

コロナ禍が収束に向かえば、日本を訪れる外国人の数は回復するだろう。インバウンド消費は今や日本経済にとって無視できないものになっており、外国人観光客がいかに喜んでもらうかを各業界が必死に模索している。ところが観光以前に、誰にとっても必要な空気や水が汚染され、食をも脅かしているとすればゆゆしき事態である。

私は普段、「香害」関係の情報をツイッターから得ることが多い。毎月第一土曜日には被害者らが「香害は公害」をハッシュタグにしてツイッターデモを行っている。先日は香港在住の日本人のこんな声が流れてきた。「5月に東京に一時帰国した人だけど近所散歩したら空気が香水くさいくさ何の匂いだろうと不思議に思ったら消臭剤と柔軟剤と聞いてショックでした(引用者注…ドクロ

のマーク二つ)外であれだけ匂うという事は相当使われていますね」

香港といえば東京以上に集合住宅が密集している印象が強いが、そこで暮らしている人さえ日本の空気を異常と感じたのだから、状況は深刻である。コロナ禍で久しぶりに帰国した日本人だけでなく、日本を旅行した外国人にもいずれ異変は伝わらずだ。たとえ香水をつけるのに慣れた欧米人であっても、彼らはTPOを重んじるため、料理の香りを楽しむべき場所で「香り」に邪魔されたりしたら怒るだろう。そもそも高級な香水ほど、天然の成分にこだわりの時間の経過とともに移ろう香りを楽しむものだから、マイクロカプセルで「一週間続く香り」を張り付ける柔軟剤とは発想が異なるのだ。

日本の空気に顕著な「色」がつき始めたのは、この十数年ほどのことで、きわめて新しい問題である。二、三十年前は、外国へ行って空港に降りた時に、その国ならではの匂いを感じるがあった。例えば北京の空港はいつも、ムツとする油のような匂いがたちこめていた。今から考えてみると、それは北方特有の石炭の匂いだったのかもしれないし、脂っ

こい料理を食べる人々の体臭だったのかもしれない。反対に、日本の空港に帰ってくると、どこか無機的な匂いを感じた。白く光るリノリウムの床から発する匂いだったのか、人の体温をあまり感じさせず、中国での濃い人間関係に疲れた私をむしろほっとさせてくれた。

日本人といえば、匂いのしない人々というのが、ある時期までの世界の常識だった。白人に比べて体臭も少なく、風呂好きで、清潔を重んじる人々。料理もあっさりしていて、香辛料を使うことも少なく、食材本来のうまみを追求する人々。こうした日本人の特徴と、淡泊・質朴・謙虚などの価値観を重んじることはつながっていたと思う。

それがこの二十年足らずの間に、ところかまわず勝手な「香り」を発売させるようになったのは、日本人の清潔好きを逆手に取り、体臭恐怖とでもいうべき観念を植え付けたメーカーのマーケティング戦略のせいだろう。加えて、コロナ禍による衛生観念のさらなる高まりが、「抗菌」「消臭」など新たな付加価値の売り込みを容易にした。マスクをしているため、自分がどれほど濃厚な「香

り」や目につんとくる「抗菌」成分を発散させているのかは気付かない。こうして個人の身だしなみの範囲であったことが、公共の空間を侵し、他者まで傷つけているのだ。

「香害」は人口密度の高い都市部で目立つ現象ではあるが、人が身につけた「香り」は人が赴くところどこでも届く。公園でも、海辺でも、登山道でも、人工的な「香り」で台無しになったと嘆く声がある。きれいな空気を吸い、自然を楽しむべき場所が、「香り」によって損なわれているのである。

アウトドアだけでなく、展覧会やコンサートなど、多数の人が集まるところも要注意だ。たちこめる「香り」に耐えきれず途中で外に出てしまった人もいるし、発散されるマイクロカプセルが貴重な展示品や精密機器に付着することを心配する声もある。体調不良を感じる人は外出やレジャーを控えるようになり、消費意欲も低下するから、「香害」は大きな経済問題であるといえよう。

4. 「香害」は輸出されるのか

このまま「香害」が拡大すれば、日本らしさは失われ、外国人から愛

される国ではなくなるだろう。しかし政財界にはまったく危機感が見られない。

「香害をなくす連絡会」の再三の訴えを受けて、2021年に関係五省庁は連名で「その香り 困っている人がいるかも？」という啓発ポスターを作成した(図3)。同年7月には「香害」被害者らを中心とする「カナリア・ネットワーク全国」も結成された。しかし多くの被害者の願いにもかかわらず、マイクロカプセル使用製品に対する規制や、成分表示の義務化などは進んでいない。厚生労働省は「(化学物質過敏症の)発症のメカニズムが明らかでない」などと繰り返すばかりであり、被害者救済の遅れた水俣病を彷彿とさせる。

水俣病では、近くの海で採れた魚介類を食べることが、症状の原因であることは明らかだった。海を汚染しているのが工業排水であることも明白だった。しかし企業も行政も、原因物質が何であるのかにこだわり続け、今苦しんでいる患者への対策をおろそかにした。

水俣病研究で知られる原田正純医師は、石牟礼道子『苦海浄土——わが水俣病』の新装文庫版(講談社、20

04年)に寄せた解説「水俣病の五十年」でこのように書いている。「……チッソは何ら有効な対策を立てないばかりか、熊本大学医学部の原因究明を妨害さえした。行政もまた、驚くほど無策であった。これはたとえ、驚くほどの重大な危険があるのに、弁当の中の何が原因か分からないからと言って売り続けるようなものであった」(同書392頁)。

危険な弁当を売り続ける企業とそれを黙認する行政の姿は、「香害」製品メーカーと関係省庁に重なる。今すぐ腹を満たさなければならぬ人が、目の前で売られている弁当を買うように、現代の人々は洗濯や掃除の必要にかられて、スーパリーの棚に並んでいる洗剤を購入する。色とりどりのパッケージは美しく、人気タレントが広告の中でにこやかに笑っている。どうして危険性など想像す



図3 消費者庁・文部科学省・厚生労働省・経済産業省・環境省の連名による啓発ポスター。「使用量の目安などを参考に」「お使い下さい」とする文言は、化学物質過敏症の患者の根本的な救済にはなっていない。

るだろうか？

こうした状況は、中国も同じである。柔軟剤は中国語で「衣物柔順剤」といい、通販サイトや生活情報サイトを見ると、多くの銘柄が販売されている。ユニリーバ(イギリス)、P&G(アメリカ)など世界的メーカーのブランドに並び、日本の花王、獅王(ライオン)の製品も主要ブランドとしてランキングしている。ただ想像以上に中国国内メーカーの製品が多く、すでに生活に定着していることがうかがえる。

ブランド別に香りの種類や強さなどが解説され、使用者の口コミが書かれていることも、日本のサイトと変わらない。柔軟剤を好んで使う人がいる一方で、「○○(ブランド名)を長期で使用すると体に影響があり

ますか？」のような質問が掲示板に書き込まれていたりもする。それに対する回答の中には、欧米の先行研究などをもとに、柔軟剤に含まれる化学物質によって健康被害が生じる可能性をはっきり指摘するものもある。つまり、柔軟剤に何らかの危険性があることは、インターネット上で少し検索すればわかる状態である。

日本語の「香害」は「公害」とのかけことばであり、中国語としてそのままでは通用しない。日本の状況を説明するため括弧付きで「香害」と紹介された記事や、「香料公害」とする記事も見られた。『香害は公害』の著者水野玲子氏が、多言語による日本紹介サイト「ニッポンドットコム」に寄稿した「香害…甘い香りが引き起こす新たな空気公害」(2021年6月9日)も中国語に翻訳されている。また、『日本経済新聞』の記事「広がる『香害』対策遅れ 柔軟剤? 原因解明されず」(2022年4月20日)も「日経中文網」で配信されている。日本に関心のある中国人であれば、これらを読んで日本を反面教師にすることもできるのだ。

を体験した中国人によきものとして受け止められる場合もある。例えば、袁静『中国「草食セレブ」はなぜ日本が好きか』(日経プレミアシリーズ、2019年)によると、日本旅行中に民泊で火鍋を作って食べた中国人が、少しでも匂いを消そうと室内用消臭スプレーを買って使ったところ、効き目に驚いた。SNSでボトルの写真を添えて発信したことをきっかけに、「火鍋の匂い消し」として話題になり、中国にはないお土産として大人気になったという。

ちなみに市販の消臭剤の「消臭」機能とは、匂いの元を絶つのではなく、嗅覚に作用して特定の匂いを感じにくくしたり、合成香料で嫌な「ニオイ」を覆い隠したりすること(マスキング)である。つまりは匂いの「上塗り」をしているに過ぎず、問題解決にはなっていない。しかしそうした説明は製品にはまったく書かれていないし、詳しい成分も書かれていない。「消臭成分」「香料」など、おおまかに表示してあるだけであり、含まれる成分すべての表示を義務づける法律はないのである。こうした事情もわからない中国人は、お土産の消臭剤を喜んで室内に振りまき、

成分を体に吸収することになる。

中国では2008年に、メラミンが混入した粉ミルクで5万4000人もの乳児が腎臓結石にかかるという大事件があった。当時一人っ子政策下で子どもは宝であるのに、とりわけ弱い立場の乳児が被害に遭ったことに親たちの怒りが爆発した。本来なら体内には入らないはずの化学物質が混入したのは、原乳の成分を偽装した酪農業者と、利益のために事実を隠蔽したメーカーのせいだった。以来、中国では粉ミルクや乳製品に対する信頼が地に落ち、その反動もあって、中国人は日本に来ると安くておいしい日本の牛乳を飲みまくっているという(前出『中国「草食セレブ」はなぜ日本が好きか』)。

中国人は化学物質の怖さを知っており、日本のメーカーに対する信頼を持っている。「日本」というブランドは「安心・安全」のしるしだからだ。それではもし、信頼が裏切られたらどうなるか? 地に落ちるのはメーカーの評判だけではなく、「日本」のブランドイメージそのものなのだ。話を元に戻そう。中国人観光客の到来を待ちわびている業界や地方自治体は、率先してきれいな空気とお

いしい水を守るという目標を掲げ、全力をあげて遂行すべきだ。地域の貴重な自然や、築き上げてきた名声を失うのはあまりにも惜しい。「無色」の空気と水は誰にとっても必要なものであり、現地の住民が健康で楽しく暮らしてこそ、観光客も喜んでやってくるはずだ。真の利益とはどのようなものなのか、困難の多い世界で細く長く生きていくためにはどうすればよいのかを、そろそろ日本人も真剣に考える時が来ているのではないだろうか。

●注

- 1 「爆買いの次は『洗肺』だ 中国人旅行者が日本の地方都市に注目」『AERA』2019年5月20日号。
- 2 香害をなくす連絡会「香害」アンケート集約結果発表「9000人の声を届けます」。<https://nishoren.net/wp/wp-content/uploads/2020/06/1e79d761ab1852698798cc92b172db8-1.pdf>
- 3 岡田幹治「日本の『香害被害者』は推定約1000万人、“先進国”米国を迫る」ダイヤモンド・オンライン2018年9月20日。<https://diamond.jp/articles/-/180123>
- 4 JSPS科学研究費17K20041「合成香料を内包したマイクロカプセルが水界生態系に与える影響の検証」。<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-17K20041/>